

こちらフリースクールです。餅つき大会で繋がるう！

寒波の影響で西日本や日本海側が大雪となった今年の冬。福島市では幸いそれほどではなかったものの、雪が降り冷たい北風が吹くいつも通りの冬模様でした。子どもたちは、この雪も風も遊びの材料にして、雪合戦や凧揚げ、そり遊びと活動的に過ごしました。2月は、コープのスタッフさんに協力いただき、楽しみながら生春巻きなどを作り、食べることの大切さを学びました。3月にはスマートフォンの使い方について考える「スマホ教室」などが予定されています。このようにフリースクールでは、子どもたちが興味関心のあることから企画を作っていくとともに、子どもたちが自分で選択できるようにするための学びの機会を提供しています。しっかり子どもたちの声や思いに耳を傾けたいと思っています。

2月3日、フリースクールを会場に「餅つき大会」が開催されました。昨年の秋より、株式会社JCB様よりご支援を頂き、地域と繋がるためのワクワクする活動を考えてきました。その第1弾として、地域の方にも参加してもらい、フリースクールの存在や活動を知ってもらうため、この企画を実行しました。当日は、フリースクールの子どもたち、保護者の皆様、地域から集まってくれた小さい子どもたちやそのご家族など、総勢30名以上が集まってくれました。冬晴れのもと、賑やかな玄関から、「べったんべったん」と餅をつく音と、「よいしょー、よいしょー」という威勢のいい声

が響き渡っていました。初めてフリースクールを訪れてくれた方からは、「アットホームな雰囲気ですね」等の温かい言葉や、地域の皆様と繋がっていくためのヒントを頂くことができました。これからも地域にある子どもたちの居場所の大切さを発信していきたいと思います。今回ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



これからの活動予定

フリースクール
■3月11日(土)
「卒業と成長を祝う会」
■3月29日(水)30日(木)
「卒業旅行」



※イベントの詳細につきましては、
ビーンズふくしま事務局まで
お問い合わせください。



新人紹介

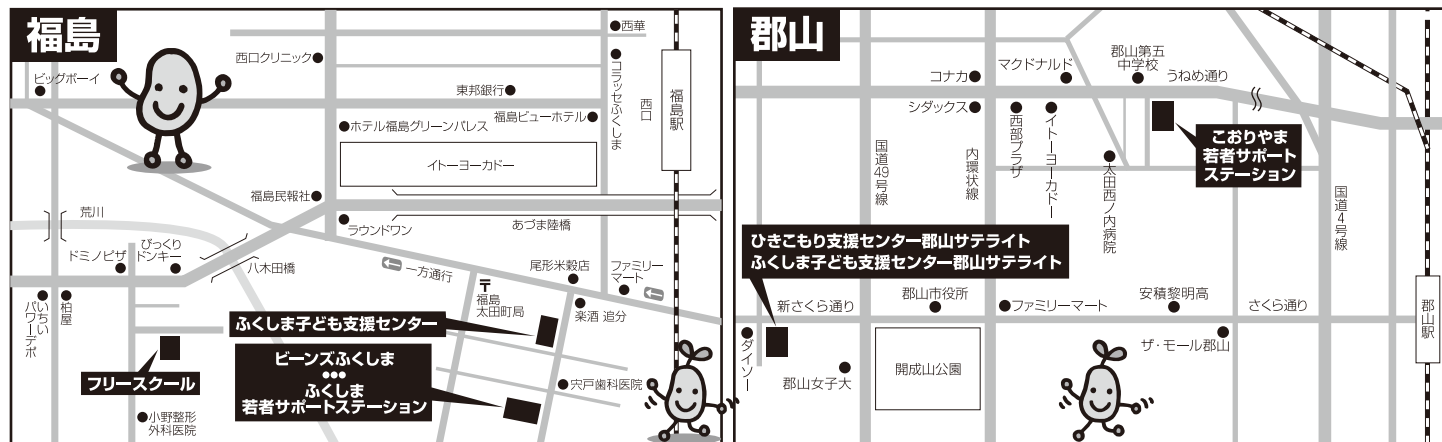
毎日が学びの日々。
好奇心旺盛な私にとって
毎日が刺激的です。

ふくしま
子ども支援センター
県外避難者支援担当
小関 翼

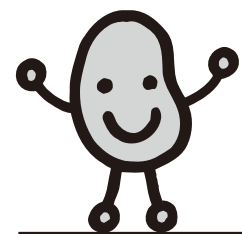


編集後記

今年も3月11日を迎えました。この時期になると、被災者の支援をしている事業にメディアからの取材依頼が多く寄せられます。その記者に子どもたちの姿を話すスタッフのことを見ていると、あの東日本大震災がなければ出会うことができなかった沢山の子どもたちが今目の前にいるのだと改めて気づかされます。子どもたちが本来の姿を取り戻せるように、これからも私たちは子ども・若者の支援に全力を注いでいきます。



●ビーンズふくしまのホームページ こちらへアクセス → <http://www.beans-fukushima.or.jp/>



ビーンズ通信

●発行日／2017年3月10日

Vol.80

●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL <http://www.beans-fukushima.or.jp/>
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

今年もまた3.11を迎えて

2017年3月11日、あの東日本大震災の日から6年がたちました。

今も79,446人が元の自宅を離れて暮らしているのが、この福島の現状です。その内訳を見ると、今年初めて県内避難者が県外避難者を超えたといえます。多くの市町村で避難指示解除が行われたということもありますが、実は仮設住宅や借り上げ住宅から災害公営住宅への転居、避難先での住宅購入に

よる転居も「避難状態の解消」と見なされている現状があります。減少したと見なされる避難者数の中にそうした方々がいること…その方たちは、ふるさとへの帰還をしたわけではなく、元の生活に戻ったわけではないことを忘れてはならないと感じます。

次の選択をすることは、個人が決めていくことかもしれません。でもそうになったことの原因を私たちは忘れては



いけないと思います。そして、それぞれの選択の中で子どもたちの幸せが保障されなくてはなりません。それは私たち大人が、何年たとうと忘れてはならない課題です。1人1人の子どもたちが孤立せず、子ども本来の力を損なわれることなく、その育ちを支えていくことができるよう、ビーンズふくしまは地域の方々と繋がりながら取り組んでいきたいと思っています。

被災した子ども支援のはじまり

平成23年3月の東日本大震災後、ビーンズ自体は4月になんとか通常事業の再開ができました。ビーンズ独自の支援として最初だったのが、「こころの相談室」の取り組む「豆の木プロジェクト」(被災者のための無料相談)の取り組みでした。阪神大震災等の経験からも、被災者の心のケアの取り組みが必要なことは想定していました。そこで来所型で相談が受けられる仕組みをつくったのです。一方で、それだけではすくいきれない課題やニーズもあることもわかっていました。そこで、その取り組みと平行しながら他のNPOと協働で、避難所生活から先の仮設住宅への移行を見越して設置される地域の資源やコミュニティの情報、仮設住宅の設備や仕様などのアセスメント調査を実施し、福島市や二本松市等の仮設住宅をひと通り回りました。ビーンズの視点からみると、仮設住宅そのものの住環境の問題(狭さ、音の問題等)、仮設住宅周辺の地域における子育てリソース(学校や周囲の子育て支援施設等)、住民や子どもの生活を支えるコミュニティがバラバラになってしまい、ゼロからのスタートをしなければならない状況など、かなり過酷な状況がわかって



2011～2012年頃の活動の様子

きました。そして、支援が入らず、被災した住民や親子がその環境下に置かれたときに、2次的・3次的にどのような結果につながるか、これもビーンズのこれまでの経験からみると、かなり大変なことになるという実感でした。家族やコミュニティの支えが弱くなる中、子どもが大人に相談しづらかったり、避難所や環境の変化の中で我慢を続けなければならなかったり、その歪みが必ずどこかにでてくるだろうという心配がありました。

学校の面では、区域外就学という形で避難先の学校に入る子、廃校等で再開した避難元の学校に通う子など、それぞれ新しい環境に慣れていく大変さや、スクールバスを使っの長距離通学の問題などもありましたが、それで

も安心できる環境で集い、学ぶことができることは子どもたちの大きな支えになっていたと思います。

この状況を踏まえたときに、学校外の家庭や地域での支えは、被災した子にとっては非常に脆弱な状態にあり、ビーンズが支援していくべきはやはりその部分だろうと思ったのです。そしてスタートしたのが仮設住宅での子ども支援「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」でした。被災した子どもの生活と環境に寄り添いながらの支援。この中で見えてきた視点が、この後に始まった東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口(現・ふくしま子ども支援センター)にかかわる、県外で孤立化する親子支援や、広く福島の子育て環境を支えていく仕組みづくりにもつながっていくのです。

うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト | 県北



仮設住宅での学習支援の様子

震災後、仮設住宅で生活する子どもを対象に「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」が立ち上がりました。県北では主に土曜日に浪江町からの避難者が暮らす仮設住宅を訪問し子どもに遊びと学びの場をつくる活動を始め、2011年12月には平日の仮設住宅集会所での学習支援という現在まで続く活動が始まりました。学習支援と名付けられてはいますが、開始から一貫してこの事業が目指してきたのは、「子どもの居場所をつくる」ことです。避難を余儀なくされ慣れない土地で始まった新しい生活、思い切り遊ぶこともままならない狭く不自由な住環境、仮

設住宅と遠く離れた学校とをスクールバスで往復する毎日という、子どもが持っている思いや力を自ら制限してしまいかねない状況。そんな中で子どもが集まり、子ども同士や住民、ボランティアなど様々な人と関わりながら、一緒に遊び、宿題をし、おしゃべりをする。そうしたありきたりですが大事な時間を過ごせる場をつくることで、子どもの日々が少しでも良いものになるよう意識してきました。

時には子どもと仮設住宅の周囲を散歩したり、近くの公園へ遊びに行ったりしたことあります。仮設住宅近くの学校の児童を私たちの活動へお誘いし、子ども同士の交流の機会をつくる試みもありました。仮設住宅

の外にも自分の居場所があると感じられることも、周辺地域とのつながりが薄い避難生活では大事に思えました。

仮設住宅に子どもを中心としたコミュニティをつくることも目指したことのひとつです。学習支援への参観や送迎のお願い、保護者説明会など保護者との関わりを大事にし、子どもと保護者だけでなく仮設住宅自治会や住民にも参加・協力してもらえるイベントを実施してきました。周囲の大人が子どもに関心を持ちみんなで見守る雰囲気をつくるこ

とが、子どもの安心につながってきたと思います。



うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト | 県中



仮設住宅での学習支援の様子

震災後、県内では多くの方が元いた地元を離れ、仮設住宅や借り上げ住宅での避難生活を強いられました。不登校を経験しているこどもの居場所「フリースクール」をはじめ、こども若者の支援活動を行っているビーンズふくしまには、各地から「避難しているこどもの為の学習支援をしてほしい」「仮設住宅のこどもを支えてほしい」という声が届きました。そこで、県中のうつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトは、避難によって生活区域が離れ離れになったこどもに寄りそい、支援することで、福島のこどもが学びや遊びを通してのびのびと成長できるよう、郡山市を

拠点に活動を開始しました。

活動は震災から約半年後の2011年9月から、郡山市内の富岡町社会福祉協議会「おだがいさまセンター」や、三春町にある熊耳仮設住宅の自治会から要望を受け、全町民、村民が避難対象区域となった富岡町、川内村出身の小中学生、高校生を対象に、こどもの放課後学習支援「学習サポート」、体験活動プログラム「子ども広場」を開催しました。毎週2日の活動で、それまで狭い仮設住宅の中で勉強に集中できないと話していた子たちは、学校から帰ると、集会所に集まって友達と一緒に勉強するようになりました。

活動中は、学年の違う子と接する機会にもなります。上級生が下級生の面倒を見ていた

り、友達同士で誘って鬼ごっこをしたり、勉強を教え合ったりと、笑顔で活動に参加するこどもたちに、スタッフも元気もらいながら過ごしています。ときには今まで楽しそうに参加していた子が学校や家庭での悩み事を話す様子もみられましたが、普段から学校や家で頑張って勉強したり、生活しているこどもにとってガス抜きできる場があることも安心や成長に繋がるのだと、こどもそれぞれの話す言葉やしぐさから日々感じています。



ふくしま子ども支援センター



スタート当時の事務所(建物2階部分)

この事業は平成24年に県の委託事業としてスタートしました。まず、自主避難している親子の実際の状況を知るために現地へ訪問し、行政や子育て支援団体からお話を伺いました。

そこから見てきたのは、不安やつらさを抱えながら自主避難者であることで遠慮しながら生活している母親と子どもの姿でした。

ビーンズではこれまでの子ども若者支援の経験から、子どもの健やかな成長のためには、親の安定がとても重要だと実感していたので、母親をサポートすることで子どもの支援をしていくことにしました。具体的には、行政や子

育て支援団体が開催するイベントにスタッフが積極的に参加し、情報収集し、自主避難した親子が参加しやすいようなイベントや会合を企画開催しました。

そこでは母親の気持ちを尊重し、それぞれの背景や思いを受け止め、母親自身が自ら選択することを大切にすることを第一にしてきました。そうして母親の気持ちが安定すると、子どもへの関わりが変わり、子どもが安心してのびのびと成長していくと考えたからです。

また、支援者との連携では、関わった子ども達の様子を支援者と共有することで、信頼関係を築いてきました。支援体制の強化のため、県内外で連携している行政、子育て支援団体との情報共有、支援に必要な知識向上

のための研修も行ってきました。

県外でサポートをする中で県内に戻ることの不安を耳にし、自主避難から戻った親子のサポートの必要性を強く感じています。そのため、県内の各地域で行政や子育て支援団体と連携して月1回「ままカフェ」を開催しています。平成27年には日常的に通える居場所として「みんなの家@ふくしま」が生まれました。

私たちのこうした活動が、福島の地に戻ってきた親子が地域の中で安定した生活を送ることに役立ち、子ども達が元気に成長していくと信じてこの事業を行っています。



被災支援を通して、得られたこと

ビーンズふくしまとしてこの6年間取り組みできた被災子ども支援事業。震災と原発事故という、これまでに無い状況の中、試行錯誤しながら、子どもたちや親御さんたちのニーズに合わせながら創ってきた取り組みでした。

仮設住宅の子ども支援では、これまでビーンズふくしまが大事にしてきた子ども観を実践する場として、子どもの力を信じ、そのままの姿を認め、その力を発揮できる場を創ることができました。また、県内外の親子支援の活動は、県内外の各支援団体との連携があってこそ実施できた取り組みであり、ビーンズとして新たな団体とのつながりを大きな財産として得ることができました。そして、これらの取り組みは、マスコミで何度も取り上げられたり、復興副大臣が活動を評価してくださったり、企業の皆さんが活動に共感してくださり、ご寄付や助成金をいただいたりという結果にも繋がりました。

被災支援の取り組みは、広くビーンズふくしまを知ってもらう機会になったと共に、それをきっかけにもともと行っていた子ども若者支援の理解を広めていくことにも繋がりました。

そして、県中地域における「ふたば開成楽舎」という居場所としてのこれから活動展開や、「みんなの家@ふくしま」を通しての多世代交流・地域交流という繋がりをつくる活動は、それぞれ孤立問題解決の場としても展開できていく取り組みであると共に、「地域の繋がり」の崩壊」という以前からあった社会課題の解決に近づくことができた取り組みになっていると感じています。

